



# 祐介の目

## 伊勢神宮と赤福

大田ゆうすけ No.89  
(福山市議会議員)

毎月1日号に掲載

実際は違い、フットボールピレッジへの寄付の計画は偽装事件以前からあり、当初7面の計画を5面に縮小した上で平成24年に完成したそう。普通の企業なら計画を中止しただろう。平成29年度の利用人数は10万人を超えたそうだが、伊勢市はこのサッカー村で合宿をする際の補助金を用意している。夫婦岩で有名な一見浦の旅館街に宿泊すれば一人一泊千円の補助金が出る。かつて二見浦は伊勢神宮参拝客や修学旅行生で栄えたが、どちらの客も減少し廃業するホテルや旅館も出る中、サッカー村と補助金は大きな追い風となった。

議会の行政視察で伊勢市を訪問した。伊勢と言えば伊勢神宮と赤福、両者の関係は神社のお土産という単純なものではない。平成5年、当時の赤福の年商に匹敵する約140億円を投入し、「お伊勢さんのおかげ」との感謝の気持ちを込めて立ち上げた門前町「おかげ横丁」は参拝客で溢れていた。ここが無ければ観光地としての魅力は半減だろう。

伊勢フットボールピレッジ(サッカー村)も訪問したが、総工費15億円のうち13億円は赤福からの寄付だった。そこで平成19年の赤福の賞味期限偽装事件の影響について質問した。売れ残った赤福を回収し、一度冷凍保存したのち包装紙に解凍した日を製造日として賞味期限を掲載していた事件だ。赤福はこれにより約5ヶ月間営業を停止、寄付は企業イメージ失墜の挽回策ではないかと感じたからだ。

赤福の偽装は決して許される事では無いが、食中毒等の被害者が出たという話ではなく、マスコミのバッシングに対して伊勢市民は赤福を応援していたそう。現在、赤福は業績のV字回復を果たし、あの事件によりかえって知名度が上がったのではないかとこの声も聞いた。赤福は利益を公共に還元することにより、更なる伊勢市への誘客と売上増を実現している。政教分離の指摘も受けることなく、宗教施設である神社と行政と民間企業がタイアップして成功した地域活性化ビジネスモデルとして注目したい。